

人文会 ニュース

業務用

座談会 V

人文書出版社の理念と現実…………… 1

東京大学出版会常務理事	中平千三郎
みすず書房取締役	相田 良雄
晶文社社長	中村 勝哉
青木書店社長	山根 襄
司会	小林 一博

図書館へのアプローチ…………… 20

委員会報告—代表幹事…………… 22

販売委員長

調査企画委員長

弘報委員長

会員社名簿…………… 24

'82.8

35

カール・マルクス著

田中菊次編注

哲学の貧困 [ファクシ ミリ版]

— 著者自用・加筆・初版本 —

マルクスが初版本に自ら加筆・修正(約300箇所)を加えた蔵書の復刻版。黒エンピツ・青エンピツの書込み文字を精密な製版技術と2色刷りによって原本どおりの復元に成功! 編者の書込み部分の詳細な解説(日本語版)と、『哲学の貧困』の各版比較を付して完全な研究資料として出版。

〈菊変型判/極上製本/函入〉

7月上旬発売! 予定価9800円

東京神田 **青木書店** 神保町1

有斐閣選書

ぜんそく

小林節雄編 〓専門医による最新治療ガイド 〓発病のしくみや治療法の最新情報を経験豊かな専門医がやさしく解説する。 一四〇〇円

カウンセラー

利夫・長谷川孫一郎編 〓さまざまな出会いと実践にまなぶ 〓多様な場面における困難な実践の検討を通して探求した。 一四〇〇円

身障者の心の世界

高瀬安貞著 〓リハビリテーションのために 〓閉ざされがちな身体障害者の複雑な心理を実践と理論の両面から描き出した。 一五〇〇円

有斐閣/東京神田神保町2-17

大月書店

科学全書

編集・日本科学者会議

科学の最前線をわかりやすく伝え、自然と社会、人間をむすぶ、ガイドブック。一〇〇冊をめざす壮大なシリーズ。●B6判カバー 各1200円

①核兵器と核戦争

服部学

戦慄の核兵器開発の実際と核廃絶の可能性

②海の微生物たち

清水潮

地球の生命と環境をささえる多様な姿

東京都文京区本郷2-11-9/電話03(813)4651(代表)

●「内容見本」送呈

西山松之助著作集

日本文化史・近世社会史の画期的な研究成果! 「西山文化史学」の集大成。《全八巻》予約受付中

第一回配本/第一巻 発売中

家元の研究

本文六〇〇頁/定価七八〇〇円
以後三ヵ月に一冊ずつ配本/定価六八〇〇円/八〇〇〇円予定
/A5判・上製・函入/四八〇頁
/六〇〇頁(付録付)/分売自由

- ① 全八巻/続刊
- ② 家元制の展開
- ③ 江戸の生活文化
- ④ 近世文化の研究
- ⑤ 近世風俗と社会
- ⑥ 芸道と伝統
- ⑦ 江戸歌舞伎研究
- ⑧ 花と日本文化

吉川弘文館

東京・文京・本郷7-2
電話 03-813-9151

人文書出版社の理念と現実

司会 きょうは、人文書の販売をめぐっての座談会シリーズの五回目です。これをしめくくりしたいと思います。

本来ですと、第一回目の時に「人文書とは何か」と設問して、人文書とは何かについて

ご出席していただいた方々にきくべきだったと思います。しかし「人文書とは何か」を定義することは大変難しいのではないかと考えたものですから意識的に避けました。それだけで議論が終わってしまうのではないかと

思ったんです。ところが、このシリーズに対するいろいろなご批判の中で「人文書とは何か」について話してもらいたかった、との声がありました。

そこで、今回は、ご出席の皆様が考えてお

東京大学出版会常務理事 人文会 会長

中平千三郎

みず書房取締役 人文会 代表幹事

相田 良雄

晶文社 社長

中村 勝哉

青木書店 社長

山根 襄

司会

小林 一博

られる「人文書とは何か」、皆様の社が考えておられる「人文書とは何か」をおうかがいしたい。

人文書について事典的な定義はできると思いますが、人文書が対象とする幅は広がっています。人文書が売れないと言う場合でも、たとえば文庫本になっている人文分野の本は、人文書に含めるのか、含めないのかもはっきりしていません。その辺まで踏みこんでみると、人文書の読者が減っているのか、増えているのかもわからないだろうと思います。

人文書は定義できない？

A 「人文書とは何か」ということは、「人文会とは何か」につながると思うんです。人文会結成の折には、人文書を主として刊行している出版社によびかけて、人文書の普及販売のために協力しよう、と決めたわけですね。いうならば、二十社の扱っている出版物を対象にしたといえるのかも知れない。だけれどもわたくしどもでは、人文、社会、自然と三つの分野がある中で的人文科学という考え方がありますね。それから、かつて東大の

文学部を、「哲史文」と呼んでいたことがあります。いまでも京都大学は「哲史文」といいます。哲学、史学、文学のことです。東大は大学院の研究体系が十分に分れています。そのうちの二つに人文科学研究科があります。

この科が対象としている分野のものが人文書ということになりましたね。哲学、思想、歴史、心理が入っていますね。この場合は、社会科学を除いています。社会科学、自然科学という概念とはちょっと違うんですけど。

わたくしは、これに本来ならば芸術、音楽の部門も入れていいのではないかと思っています。広くいうと芸術、音楽を含んだ人間の心の在り方にかかわるもの。それが人文書だと思えます。

C よくわからないけどね。アメリカでは分類不能が五〇%あるといっています。日本では十進分類法によって何とか分けているけど、逆に、分類不能なのは全部人文ではないか(笑)という気がしますね。

著者は一つのテーマで本を書くわけですけど今はいろんなアプローチの仕方がある。哲学的なアプローチもあるし、社会学的アプローチもある。医学的方法もある。心理的方

法、宗教的方法もあるでしょう。安楽死の問題などは、これらが皆重なるでしょう。五つのアプローチの方法がある。このような本は分類不能なんです。

D 人文書という分け方、考え方には、それ自身一つの意味もあるし、歴史的な変遷もあります。現実的な問題として、人文書とは何かという問題と、人文書といわれている出版物は、業界内で、取次、書店でどう扱われているかという問題との二通りが関係なくありますね。そのことがいろいろ問題になってくるわけですね。

さっきAさんが言ったように、人文書といった場合、人間の心にかかわるもので、それに関係する出版物ということがあるのでしょが、取次、書店から見た場合は、そういう分け方じゃどうしようもない。

定義がないと書店は迷う

いろんな出版物があつて、それを歴史だ、哲学だ、心理だといったところで、編集者が企画を立て、先生方と相談してある本をつくる、その場合にいくつかの要素が入りこんできているから、分類をする場合、どこに入る

のか、社内で侃々諤々として意見が割れてしまふんですね。仕方がないから、この著者の専攻はこうだからこちらに入れておけとか、苦しまぎれに分けている例が結構ありますね。

そのような現実があるから、店頭ではどの棚に並べるか迷ってしまう。出版社の欲から言うと、複数展示にして下さいということになりますけど、書店では困るわけです。つくづく思うのは、人文会二十社でやっていると、学問的な分類というより、販売を優先して考えるわけです。わたくしのところは、人文とは社会科学がかかわってくるから、社会科学のな考え方になりますね。しかし、法律、政治経済ははずした形で考えてはいません。今の時代、純粋な人文などはありません。哲学、心理、宗教などと狭く考えない方がよいのじゃないか。

司会 著者・出版社の段階と、取次・書店の段階では、人文書の分類の仕方、解釈の仕方が違ってきますね。この辺で話が噛み合わなくなりますね。

先ほど、Aさんから芸術、音楽の分野まで人文書に含めたらどうかとお話がありました

が、Bさんいかがですか。

B 「人文書とは何か」と厳密に考えたことはない。しかし、先ほど話があったようにぼくも、人間とか社会について精神面からアプローチするものは全部人文書とっていいと思います。だから、芸術、音楽は当然含めていいし、それだけでなく小説をはじめ文学書こそ、本来人文書の中核をなすものだと思います。ただ、業界では芸文書という分類があって、作品的なものは皆そちらに入れるので、狭義の人文書は、研究的なものに限っているのではないでしょう。

「人文図書総目録」に出稿するとき、いつも迷うのはエッセイです。評論は文学であり音楽であれ、ためらわずに人文書とみなしてありますが、エッセイは人文書か芸文書か区別できないものが多いですね。

司会 小説自体も広くなっていますね。

おもしろさは啓蒙書に

B 人文書は広いわけですから、書店は、定義に余りこだわらずにテーマによって棚を独立させていっていいと思いますね。

C そういう風にならうと、書店は自分で棚

を演出していただいていい。人文書の中から自由に棚をつくっていいと思う。

B 取次の方から件名についての発言がありました。人文会の会員の多くは、件名または分類を帯やスリッパに記載しています。その件名をみて、書店さんは自由に自分の棚構成を工夫していただいています。

分類をつけると、いろんな書店のことを考えると、こんな棚があるだろうか、と困ちゃうわけです。だから件名の方がいい。

司会 前回の大学生協の座談会の中で、人文書を専門書と教養書と教科書との三つに分けて考えなけりゃいけないのじゃないか、との発言がありました。

A ありましたね。大学出版部は本来学問のための出版ですから、教科書なり啓蒙書は従なわけですね。さらにいうと大学は学問研究と教育の二面がある。だから研究所があり、教室がある。それで研究書（学術書）と教科書がある。それに社会に対する還元—これが啓蒙書（教養書）ですね。部内では三位一体と称していますけどね。

研究書は、研究をすすめるための成果を積みあげてなくちゃいけないわけでしょう。そ

の成果を研究者に示すもの。片方は、後進のために出来あがった体系を教授する教科書がある。それを発展させる啓蒙書がある。教科書は大家の仕事だという考え方があつた。あるいは、現役の先生方を沢山集めて、読者を沢山つくる、との考え方もありますね。ただ、人文書のおもしろさは教養書（啓蒙書）にあると思いますね。

司会 皆様のお話をうかがっていても、人文書の定義は大変難しい、と思ひました。

A 学問、読書、文字文化の基礎にあるものは、人文書という気がしますがね。昔のことでは、例えば寺田寅彦（物理学者・随筆家）さんの随筆などは、自然科学に縁のある人たちも読んでいるんでしょう。その辺まで考えると、人文書の読者と自然科学系の読者がどの辺までオーバーラップしていくか、難しいところですね。

人文書は高いのか

司会 人文書は研究書、教養書、教科書に分けることができる。しかも、対象の幅は広い。そのことが前提の一つになっているのだらうと思ひますが、価格が高くてもいい本は

必ず売れると、よくいわれますね。その一方で、読者側には人文書が高い、本全体が高いという批判がありますね。

出版社側はながい歴史の中で、絶えずやすくやすく、できるだけやすく読者に提供したいという方針を持っています、それを上回ってまだやすくせよ、との要望があります。大学生の生活をみると、昔の学生に比べて

大変な物持ちになっている、いわば豊かな生活をしているにもかかわらず、本が高い、本をやすくしろ、といっていますね。こういうことについてどうお考えになりますか。

C 高くても、売れる本もありますし、売れない本もありますね。石油ショック以降、人件費があがっちゃっています。猛烈に。人文書の場合は一遍に売れないで、五年、十年かかって売れる本が多いわけですね。しかも、基礎の印刷部数はすごく少ない。そうすると、組版代が原価に占める比率がべら棒に高くなってしまふ。組版代とは何かというと、これは（製作の）人件費なんですよ。印刷所の人件費比率は七割か八割だというでしょう。だから、どうしても定価が高くなるざるを得ない。人文書の宿命みたいなものが

ありますね。初刷りが一万部、二万部刷れる本なら、組版費の比率が低くて、紙代の比率が高くなる。紙は大量生産物ですから、そう（価格が）あがっていない。

司会 先日、「新文化」(四月二十二日号)

で、東洋経済の斎藤さんが、「適正定価」の確保を提言されました。出版業界は、どちらかというところまで本をやすくすることを読者対策・サービスの一つと考えてきた。その志向も必要だったけれど、やすくしつつきてきたために、本の再生産が困難な状態になっている。

一方に、本は高いという批判がありますけど、本は高くないという現状をアピールする必要もあるのではないか。人文会の仕事というよりこれは書協の力でやることだとは思っています。あるいは、出版業界全体の協力で新聞広告するようなこともあっていいのではないか、と思うのですが。

何に比べて高いというのか

A 高い、やすいという問題で、人文書が高いという意見には必ずしも納得できない。何に比べて高いというのですかね。本が高い

ということと人文書が高い、ということとは違
うわけでしょう。

司会 この座談会シリーズででてきた発言
ですから、人文書が高いという意味も含まれ
ているでしょう。

A 今の話で、再生産ができなくなるとい
うことは、売り切った段階で収益がないとい
うことですね。

司会 重版しにくいということですね。

B 人文書が比較的高いというのだったら
わかりますね。読者は絶対額でいっているの
でしょうから。価格を一番左右するのは部数
ですね。ところが、読者が基準とするのはペ
ージ数で比較する。人文書は刷り部数が少な
いわけですから、ページ当り単価は高くなり
ます。これを読者が納得するように知らせる
のは難しいと思いますね。

それから、印刷所、製本所によってもコス
トはかなり変わってきます。一流の印刷所、製
本所を使っていれば高くなります。こういう
ことは読者にはわかりませんからね。

人文書に限らず、日本の本は欧米よりやす
い。これは分かっていますね。再販制の
問題が起きた時、ぼくなんか委託制を維持し

なければいけない、と思ったわけですが、買
切制と委託制では価格に大きな差がつく。委
託制で千円で出せる本でも買切制なら千八百
円になる。日本の読者はその点ではやすく本
を買っている。これは、委託制の恩恵です
ね。とにかく買切制なら八割高くなる。それ
でも、学生からみると高いというのでしょ
うが。学生の一人当り本の購入費は増えては
いるが、消費者物価指数の上昇ほどは増えて
いないわけでしょう。昔、月五冊買っていた
ものが、月、四冊になり、三冊になるとい
う方向にはあるのでしょうか。でも、本の定価
の上昇指数も、物価指数より下回っているの
ではないですか。そういう意味からも本は決
して高いとはいえない。

専門書は我慢して割安

D 本が高いという指摘の場合、人文書を
射程に入れた発言だとしても、他の分野はや
すくて、人文書は高いという発言はしていな
い。あえていえば、本が高いというのは学術
書であり、専門書が高いという感じを読者が
持っている、読者の不満がある。

この場合、二つの面があるだろう。一つは

本が高いといった場合漠然とした他の本の
比較で、製作面の事情は抜きにして、ペー
ジとか、束(厚さ)で比較する。すると大手出
版社の文芸書が一ページ三元そこそこで出
て、中小版元の専門書は四六判一ページで
七円から十円近くなる。そうすると読者は高
いなア、という感じをもたれるのじゃない
か。しかし、収益性からいうと専門書の方が
我慢して割安になっている。ページ当り三元
の本の方が収益率が高い。そんな事情が読者
にわかってもらえない、というのがわれわれ
の悩みの一つ。

それから、いつの時代でも、本がやすいと
いわれて買われたことはなかったのではない
か。あえていえば、読者の所得、生活水準に
比較して、欲しい本が買えないことからきた
問題ではないか。また、最近では、若い人の本
に対する価値観も大分変わっているのではない
か。日常、雑誌や文庫本を買っている感覚で
千五百円、二千円の単行本をみるとべらぼう
に高い感じを持つんじゃないか、感じの問題
じゃないかと思うんです。

司会 読者は、厳密に本のコストまで計算
したり、推定して本が高いというようなこと

はほとんどないと思う。しかし、最近でも、三千円近い本がよく売れている例がありますね。ベストセラーとはいきませんが、これは他の本と比較してやすいと感じがあつて買われているといえますね。

また、本が高いと主張することで、本を買わない理由にしているのじゃないか。そんな面もありますね。

ところで、中小出版社の文庫本ですけど、文庫本の場合、大手の文庫本と中小出版社の文庫本は、製作費、製作部数の面で大差がでますね。しかし、価格はそう大きく差をつけて高くすることができない。

中小版元は文庫出せない

D うちには、比較的早く文庫本をスタートさせています。角川文庫とほぼ同じ時期ですね。内容も岩波文庫という青帯、白帯の分野を想定したのですが、数年前からコストの面で太刀打できなくなつてやめました。新刊も、重版も出せなくなつてしまいました。

文庫本は一番やすい版元では、一ページ一円きつているかどうか。われわれの場合、品切れになると二千、三千部の増刷、場合によ

つては千部増刷などでやりました。それで製本工賃が合わなくなつてしまいました。五割高に価格設定しても合わない。

それと、各社とも売れるものだけを追いかけて丁寧売つて行こうとしていませんね。本来の文庫本出版の意味がなくなつてしまつているのじゃないですか。

岩波が、新書について文庫も古典の複製をやりますが、古典を安く読んでもらうという従来のやり方を放棄せざるを得ない状態に追い込まれているといえますね。

司会 コストが高くなつても、定価はあげられない。文庫本は千部、二千部の重版が難しくなつている。単行本の重版も難しい。そうすると被害を受けるのは出版社とともに読者でもあるわけですね。初版が出た時に買った読者はいいが、後でほしいと思つた読者は品切れで買えない。ロングに売ってもらいたい本が、そうならないのは、読者にとつてもマイナスですね。その辺のことも含めて、人書書の定価構成はこうなつているんだ、というアピールする必要があるのじゃないか。

B 大変難しいね。
司会 難しいでしょうが、それをやらない

と読者を説得できない。

B 出版社にとつて読者サービスとは何かという点、値段じゃない。定価をやすくすることではなくて、本を切らさないことだ、と考えています。本を切らさないのが出版社の任務ですね。ただ、原価率は、うちは四〇％位でやつていてもそれでも本は高いといわれてきた。さっき話が出たように、三八％の原価率で定価設定すると四千五百円になる本を二千九百円で出版したら、はじめて読者からやすいといわれたわけだけれど、初版の原価率が五〇数％の出版社もある。

人文会でも一番高いところは、原価率三三％がある。

原価率の公表は誤解招く

C あれは台湾の組版だから、でも初版の原価率三三％は、相対的に定価が高いことですね。ですから、人文会でも相当なバラツキがある。ただ数字を並べると、五〇数％の社が良心的で、三三％が非良心的にみえることになるが、原価率によつてそう単純に決めることはできないわけですね。

ですから、原価率の公表はかえつて読者の

新たな誤解を招く結果になりかねない。

D 読者が本を高いといっている場合、原価を意識して計算していつているわけではなくて、自分の懐事情とか、類書との比較で感覚的なところでいつているわけですね。

A 類書というより、他のものとの比較でしょう。また、昔ながら映画をみるか、本を買うかと比較して本を買ったのでしょうか。選択肢も少なかった。

C それはあると思う。

A コーヒー一杯何百円、文庫本一冊三百円ですか。コーヒー一杯のむか、文庫を買うかの選択もあるでしょう。

司会 そんな選択しないで、まず、コーヒーをのむ。残れば文庫本を買うのじゃないですか(笑)。

D 喫茶店に入る時、三百円、三百五十円払うかどうかの意識はないね。文庫本を買う時は考える。(笑) 生活の仕方、考え方が全く変ってしまったている。

C さっき品切れの問題が出ましたけど、在庫管理のことを考えると、ある程度品切れつくらないと、在庫が増える一方で管理できなくなってしまう。しかし、品切れをつづけ

ると読者に迷惑かける。だから、人文書の寿命はながいですから、二、三年品切れにした後で復刊する。そうすれば、五年先の読者が買うことができる。その条件をつくらうとされています。品切れもつくるけれど、復刊も始終やる。その時に定価は改訂しますけど。

A うちには、売上げ平均定価二千七百円ですわね。

部数で定価は上下する

司会 書籍の平均定価は八一年で二千七百五十四円ですから、二千七百円なら平均ですね。もつとも加重平均は千円前後ですが。

D 定価の問題でもね、原稿枚数各五百枚のものが二点あるとします。一方を千部、片方を五千部としますね。同じ分野、同じ枚数の原稿でも定価はすごく差が出てしまう。

本の定価を付ける場合、一点当りの計算をすること、全体的な会社の事情、政策を考慮しながら付けていきます。一点毎に機械的に定価つけていけば、定価差はあっても結果的にも原価率は同じになる。しかし、実際そんなことはないわけで、この原稿は書き下しだから余計つくらうとか、これは特殊なテー

マだからうんと絞ってやろうとかで、定価は変わってくる。自由競争だから、出版社は自由に定価を決めて行くわけだけれど、千人を対象にした場合と、一万人、二万人の読者を想定した場合とでは大変な差がでますね。

こういうことはありますが、読者が買ってくれば、読者は高いと思っても納得してくれたのだ、と判断せざるを得ない。

司会 納得はできないけど、止むなく買うこともあります。(笑)

D その中で、ぼくが感じるのには、一点当りの定価設定と同時に、古い本が売れなくなってきた、新しい本の比率が年々高くなっていることですね。他社もそうでしょう。

その結果古い本は品切れにせざるを得ない。それをCさんの言われるように、二、三年して復刊すると五割も定価が高くなるようなことが出てくる。出版社の経営上からいうと、一点当りの動きだけでなく、在庫の動き方がいいか悪いかで違ってくるんですね。

古い本が売れなくなることは、経営基盤が崩れてきていることを意味します。新刊に依存せざるを得なくなると、新刊を高くせざるを得ない。しかし売れない本はいくら高くし

たところで経営的な寄与はない。売れる本の定価をあげないかぎりプラスはない。その矛盾を各社抱えているのじゃないですか。

司会 それが結局、新刊点数の増加になるし、返品増加にもなる。

自転車操業もできない

D そうですね。ただ、学術書の場合、自転車操業で新刊出すのは実際上不可能です。せいぜい頑張っても、同じスタッフでやっている、年間五十点が、五十五点くらいです。五十五点出した翌年は四十五点に落ち込みます。先生が、三年、五年かかって書くわけですから、点数は増やせない。なんでも出すというのなら別ですが。

C だけれど、出版社は定価を高くしすぎたら、はっきりしつゝ返し食いますよ。だから高すぎる定価はつけられない。

司会 それでも、高すぎるとの批判は絶え間ない。

B それはしょうがない。(笑) 宿命だから。でも、読者からほしいほしいと思っただけど買えなくて、三年経って買いましたなどという読者カードもらうと胸は痛む。

われわれは少しでも多くの読者に読んでもらいたいわけだから、常にやすくやすくと考えています。それでも、高いといわれるならしょうがない。

C 出版社としては、貴重な原稿をいただいて出版する以上、一人でも多くの読者に読んでいただくたいわけだから、定価は自律的に決められる面があると思いますよ。

D ただ、このシリーズでいろいろ批判があるのをききますと、先生方が原稿を書きあげてきた場合、どういう読者に読んでもらいたいかの想定はあるわけですが、原稿の内容、組み方を含めて、原価がいくらになるかの意識は先生方にないですね。ところが、定価の問題になると部数を多く、定価はやすくしてほしいと強調されますね。しかし、多くの読者に読んでもらいたいといいながら、叙述の仕方、欧文の注まじりの原稿でもってやすく本をつくるようになっていない面がありますね。そういうことが強く問われている時代だとは思いません。

B うちなんかにも、文庫本を出してくれという読者からの要望はありますが、文庫本の採算点が四万部ということでは、四万部出

せる本は全然ないわけです。(笑) 文庫本じゃなければ買えない、という読者は沢山いると思いますけど。人文会の中で、文庫本出せる出版社はないですね。

マニュアルは作れない？

司会 話題を変えましょう。「人文会ニュース」の三〇号から三四号にわたって、具体的な要望が出ています。これについておうかがいしたい。マニュアルをつくれ、勉強会をやってほしい、編集者も参加した交流をしてほしい、著者による講演会を共催の形でもやってもらえないか、大学図書館の予算を増やす運動を出版業界はやっていいのじゃないか、など多くの提案がありました。また、読者の意識調査を定期的に行ったらどうか、全国規模の大きかりなものでもなくともいいですか。ご意見を出して下さい。

A 最後の意識調査のことでいいですよ、日書連の大阪組合がやりましたね。このような場合に人文会も費用を一部負担して調査することはできると思いますよ。

マニュアルなども、うちは自社で作ろうと思っっていますが、なかなかできない。日販さ

んが各種のマニユアルを作っていますね。

司会 日販の経営相談室は随分作っていますね。

A ああいうものができるかどうか。あれを材料にして作れるか、検討してみたい。

B 販売上のマニユアルなら書店さんがやるべきじゃないかと思う。

司会 出版社内のマニユアルも必要でしょうが、新規の店員や、新しく人文書の棚を担当することになった書店員に、人文書とは何か、からはじまる基本的マニユアルはあつていいのじゃないか、と思います。

B 作れないことはないが、書店の棚の担当者が変わると、ガタガタになることがある。大型書店ほどその現象がある。そうなる一からやり直しになる。だから、担当者が変わると棚がガタガタになる現状を書店内部で解決できないのかと思う。折角の前任者の経験を引継ぐことができないでいるが、書店さん自身でこの面を解決してもらえないか。

司会 前任者の経験が引継がれないのは、マニユアルがないからでしょう。研修体制ができていないことでもあるでしょう。

B もちろん版元も考えていいですが、さ

っき一社で作るのが難しいといわれましたが人文会全体で作るのはもっと難しいことだと思います。

司会 たとえば、毎年春にでも、「人文会ニュース」の特別号を出す方法もとれませんかね。「人文書とは何か」、「人文会とは何か」とか、定価設定の難しさや、分類の難しさを解説したのもいいじゃないか。十六ページくらいのものでいい。

スペシャリストの養成を

A 日販のマニユアルをアレンジして人文会なりのものをあてはめていくとできるかも知れませんか。

司会 二十社それぞれの方針がありますから、完璧なものとは作れないでしょうが。

B 新しい担当者のために、各社で作る必要はありません。

D 各社でも作るのには難しいし、まして、人文会内でもいろいろ違う点があるから難しい面はありますが、各社で作ったマニユアルを書店が有効に使えるだろうか。何百社もマニユアルがもしできたら、かえって書店はこなし切れなくて困る。不十分でも、最低こ

れだけは知ってほしい、というのであれば、それなりの役割りは果すと思うが。

司会 人文会の出版社は、書店は人文書のことくらいは知っているだろうと思っただけから、簡単なマニユアル作ってもしようがないだろうと考えていると思うのですが、書店に入りたてで人文書のことなどよくわからない人のためのマニユアルはあつていい。

D 人文会の研究課題として考えていいのではないかと思います。

ただね、書店が人文書の担当にベテランを配置するかしないか、で大分ちがいます。

司会 それはちがうでしょうね。

D マニユアルでは解決しない現実があるわけですね。

B スペシャリストを養成しないで、ゼネラリストを養成する方向に書店がある。ある部門をずっと担当していて、待遇も給料もあがつていく方向でない。スペシャリストの養成を書店自身が重視してほしいですね。その方向に行かないと、この問題は解決しない。出版社のためだけでなく、読者のためにもスペシャリストを養成してほしい。待遇の問題を考慮しながら。

司会 ベテランになるには、十年でしようね。十年かけてスペシャリストを養成するだけのシステムはないでしょうね。それだけに最低のマニュアルがほしい。

B 人文書の棚を担当するにあたって、最低これだけは知っていてほしいというのは作れるでしょうね。

基本は人と人の関係

C ある社のベスト百数十店のリストと、うちのリストを比較してみましたらね、トップ級はほぼ同じなんですが、五十位から百位になるとはつきり特色がある。どこで違いが出てくるか、というと書店員が、お客さんからいろいろきいて勉強するからじゃないかと思う。それによって店員さんが出版社のファンになる。そうなると自分でマニュアル出来てしまうんでしょね。

店員さんは、お客さんの情報を一番重視すべきですし、それをやっていると思います。

B うちでも比較した。東京では、店による差は出るが地区全体では大きな差がない。ところが地方に行くと、他社と差がついている。なぜかというとうちは営業が地方に行

っていない。外回りの、営業が二人しかいない。うちは秋田などに行つてその地方を代表する書店の社長に会つても知られていない。

仕入れの人は知っているけれど、やはり、書店とのコミュニケーションがないということですね。これからの方針としては、万遍なく行けないから重点地区を決めて、年三回、二年つづけばコミュニケーションができるだろうと。

マニュアルを作つたとしても、基本は人間関係ですね。意志が通じようにならないとマニュアルだけじゃ機能しないと思うよ。

司会 編集者を含めての書店との定例的な勉強会はできないのですか。人文会は、会として書店の見学会など研修を定例化していますが、編集者も参加させるとか、編集者と書店員だけの会をもつとできませんか。

A 大学出版会には、営業部会と編集部会と二つあります。が、営業部会の方でようやく共同で巡回しようというところ。編集部会は集つて勉強会、という段階ですね。大学出版会の場合の会員名簿は、全員の名簿です。代表者、各担当者の名があります。編集部会の幹事やると結構おもしろいようです。

B 営業の面がそれにどう絡んでくるのかまだわかりませんが、書店さんと編集者との懇談会、勉強会のようなものは可能ですね。編集者は書店にはよく知っているわけですが、書店の人と話す習慣はなくてね。そういうきっかけを作ればね。

A 特定有志で始めればできますね。

司会 有志で始めてもいい。

必要なファンづくり

B 専門書の場合は余り必要でないと思えますけど、人文書の中のいわゆる啓蒙書の場合はかなり有効でしょうね。テーマ別にやるとか、組体裁の問題とかも話し合えますね。

実用書はやっていますが、人文書の啓蒙書は確かにその努力していませんね。今回、書店さんからその点についての批判を受けていますけどね。その点では書店さんの意見をよくきく機会をつくつた方がいい。

C ぼくは編集者には、自分の編集した本をよく売ってくれている書店、よく知ってくれている書店と懇意にならなくちゃ駄目だと思っています。日常的に。ただ、その場合都内になってしまいますけどね。

A うちは、特別有力店という名をつかっています。非常に早く名前をつけた。要するに特約店ではない。それは一種の友の会。ファン作りですね。協力を求める、協力してくれる書店の組織づくりをしてつながりをつけたはずです。これは一步踏み込みが足りず、発展しなかった。でも、踏み込む制度をつくったつもりでした。

その協力店の何軒かは、編集者も自分の名刺出さなくてもわかる店をつくっておけば、非常に役立つ。

司会 フォーマルな形でなくても、一人の編集者が、都内だけでなく、全国に十軒くらい懇意な書店を持っていて、その店なら夜中に電話しても相談のつてくれる書店をもつたら随分変わってくると思いますよ。

D 営業はぜひそれをやらなければいけないわけですね。

B 実際、モニター店の必要性はある。書名を決定するにしても、造本体裁を決めるにしても、モニター店の必要をすごく感じる。

A モニター(店)という場合、それが全体を代表するかどうかは別よ。読者と接している者の声、意見を直にきくことは大事で

すね。でも、「モニターお願いします」「ハイ」じゃ駄目。

ブックサロンの活用も

D 勉強会に反対じゃない。しかし、実際問題としては総論や建前論の話し合いの場じゃないわけですから、必要性が強い反面、難しい面もある。たとえば、経営的な余裕があれば、編集者に年間一週間なり十日間なり有給休暇をあげて自由に回ってこい。この人が回って意見きいてこい、というようなことができればいいけど、現実には、営業でも全国を回るだけの余裕がない。毎日仕事に追っかけられないから。編集者をそこまでできない。貧すれば鈍するで、必要性は頭の中に持っているながら実行されない。現在は編集者なり営業が、個人的にやっていることに支えられている感じ。これが、専門書出版社の実情じゃないでしょうかね。

A 日販のブックサロンを何とか利用する方法はないのでしょうか。

司会 ブックサロンは利用できませんね。

A あそこは類書が揃うわけでしょう。サロンでミーティングすることもできる。あれ

だけの施設は何とか活用したい。

B Dさんの話のように一社をみれば、日常的に追われているので、一社でつくるのは難しいけど、モニター組織なんかは、人文会として作って、各社が自由にアンケートするとか。学参書などはアンケートが随分役に立っている、とききますね。モニター制度は会として作つたらどうでしょう。

D その場合、とりあえずのことで、もつと絞って業界内だけでいいから、取次、書店の一部とつくる。読者にまで拡大すると力が及びませんからね。

B ぼくの考えているのは、書店の人とです。

D 書店が主になると思うが、プラスして少人数でも取次に入ってもらうのは必要じゃないですか。往々にして、出版社は取次を飛び越して書店の担当者のところに行く、それはそれでいいんでしょうが、取次は直接世話になっているところですから、取次の協力があるかどうかで随分違う。出版社は取次を批判するか、何も知っちゃいないか、どちらかにわかれてしまっている。もう少し、協力、理解してもらおう姿勢が、単行本のわれわれの

場合はうんと必要。その点が不十分じゃないかと感じる。著者(団)に対しては、何人かの意見をいつもきくとか、不十分ながらもしていますけどね。

編集者より経営者に迷い

司会 書店の意見の中に、出版社は著者の方ばかり顔を向けていて、書店へは向いていないのじゃないか、とありました。また、版元に迷いがあるのじゃないか。編集の立場に立ちすぎているのじゃないか。作る側に問題がある(三〇号)といっているが、それは本音なのかなどの意見や批判がありました。これらの点についてはいかがですか。また、編集者は自信を失っているのかどうか。

C 自信を失っていないんじゃないの。編集者は著者に顔を向けていいと思う。営業マンは書店に顔を向ける。これはあたり前。ただ、さっきいったように、いろいろな書店にあって、自分なりのマーケティングリサーチをやっていた方が、企画を立てる上でよりいいアイデアが出てくるのではないかとは思いますが。

B 自信を失っているとすると、自分たち

がこれまで出してきた本だけでは、経営がなりたたなくなっていることでしょう。こちらからはガンガンいわれますからね。

D 自信がないかあるか、という点では、たとえ五年前と現在とでは(自信の喪失が)あると思う。五年前、十年前はそれなりの自信、自負はあった。自社のカラー、伝統なりを守ってこれていんだ、というのがあった。この数年間の人文書を中心にした専門書の停滞というのは、自信喪失なのか迷いなのか。それも編集者より経営者の方が強いのではないか。

C そうですね。

司会 自信喪失はなくても、売れないことについて考えなければならぬところには来ているでしょうね。

D なんでもこなす編集者もいますが、おれはこれだと、狭い分野で突き込んでいくタイプもある。十人十色だから、自信があるとかないとかいってもしょうがない。だけど、経営者には、これまで五千部つくれたものが、二千、三千しかつくれない、こういうことでは経営がなりたたない、との意識が働くから編集へ注文を出す。業績が一番敏感なの

は手形を落とす人間だから。(笑)

人文書は過程が重要

司会 これも書店から出ていることですが人文書の出版社は、山の頂上付近にいる読者ばかりみていて、中腹にいる読者を見ていない、といっています。これをつぎ詰めると人文書をどう考えるか、になるわけですが。

B 仮りに五百ページの本を読むのは皆忙しいから大変なわけで、エッセンスだけ、しかもわかりやすく、一時間でも読める本——読者の需要はたしかにそうだと思う。

司会 エッセンスだけでいい、といっていますね。

B 現に実用書には、そんな書き方をしてる本がありますね。啓蒙書についてはますます努力しなくてはいけないと思うんですけど。実際、書き手の問題でいうと非常に難しい。質の高い問題をわかりやすく簡潔に書くのは大変なこと。人文書の領域では大変難しいことですね。やりたいですけど。

C エッセンスでいいというのは、人文系より自然科学系につよい。自然科学の本はその本の特色になるのは何十ページかです。あ

との何百ページかは、経過の説明ですよ。ところが、人文書の場合は経過が大事なんですね。結論だけが大事じゃないんですね。(笑)だから、人文書の場合、エッセンスだけというのはちょっと無理ですね。

D 小説でも、文体からはじまって過程が大切なわけだね。せっかちにいうと、推理小説だったら「犯人はだれか」となるかも知らんけど、文学と同じで人文書は過程があり、論理があり、学会の成果の吸収があるわけだから。

C コピーにやられているのは自然科学書だね。

B 翻訳書は厚い本が多い。海外の本の分厚さは、日本の本と比較にならない。外国著者のバイタリティは凄い。人文書はどうしてそんな結論を出したか、その実証ですよ。説得力をもつためには過程がどうしてもいるんですよ。でも、それにしても書き手を養成する必要があるのは確かですね。

そうはいっても啓蒙書出版の難しさはある。研究書は印税なども僅かですが、学者の業績になるからまだいい。しかし、啓蒙書を書いて学者は業績にはならない。啓蒙書は

売れなくちゃ駄目ですね。だから、啓蒙書の場合、絶対売らなければならぬという出版側の難しさがあります。

人文書には頑固さも必要

司会 著者、出版社に頑固な面はありませんか。書店は、人文系は頑固だと見ているようです。

B それはありますよ。頑固だと思いますよ。流行を追わないという意味で。

D 人文書の出版社が頑固だということでもないと思いますね。じゃ理工系は柔軟性があるかというところ、そうじゃないだろう。ただはつきりしていることは、専門書を何十年かやってきて歴史があり、著者があり、読者がついていて、それらを背負ってきている場合、よく思うんだけど、お釈迦様の掌の孫悟空のようになる。相当思い切ってくだけてやったと思っても、店頭で読者から見た場合余り変りばえがしない。その現実がある。今までのものを全部放棄してやれば別でしょうが、それはできないから、そこで悩み、苦しみがあつた。他社のことは別ですが。

C 書店がどういう意味で、人文書出版社

を頑固だといっているのかわかりませんが、その社にはその社の企画の準備がある。基準に合わない本になつてこない。

柔軟性が必要といつて、今までもうちで手掛けていない分野をやるとするでしょう、すると必ず失敗する。でね、逆に怖くなる。新しい分野を成功させようと思つたら三年なり、五年なりかけなければならぬ。

司会 企画の面で一定の方針を守っていることについて、頑固といっているのではないと思ひます。書店に対する接触の仕方とか、装幀だとかについてだと思ひます。

たとえば、みずすの本は書名も社名をみなくとも、書店の棚をみただけでわかるでしょう。ところが、書店から指摘があつたように、女子学生などは装幀が気に入らないと必要な本でも買わない、といわれてます。その辺の工夫もしようがないのかどうか。

B 少数数の本は並製の本にしにくい。部数の少ない本は、定価設定の上からも、厚表紙の本にしないと売れない。これはうちだけのことではない。

装幀だけ変えられない

D 有斐閣は法律書を中心にした立派な出版社ですが、幅を広げて装幀も変えてきていますね。でも、福祉の本、医療の本なり出ていますが、落し切れないところがあります。たとえば、ほんとうにハウツー的な実用書を出せるか、というと出せないでしょうね。出さないことを誇りに思っているのではないのでしょうか。

だが実用性というか、ハウツー的な本の動きがいい、ということはわかってきているので、そこで悩みはありますね。これは、有斐閣だけでなくほかの社もそうです。

変えるとなれば、企画のたて方やライターを変える。叙述の仕方も変えてしまわなければならぬ。その上で装幀を変えればいいです。すけどね。そこまでやらないで、装幀だけ変えることはとてもできない。

司会 時代に合わせる、というのはその時代にはよくても、時代そのものも変わりますからね。最近では、三年くらいで変わってしまうことがありますからね。頑固さを貫くことのもよさもでてきますね。

D 戦前の創元選書なんか、最もいい仕事をして残った選書ですね。それでも、長い間には陳腐化しますね。

B 今、書店が頑固だというのは企画だとか装幀とか含めてのことでしょう。でも、体質転換というのは、経営者が変わるなり、編集者が変わらなないと難しいことですね。

A むしろ、人文会など頑固じゃない方でしよう。

D 会社の方向を変えたことでは、理論社がいい例ですね。二十年くらい前は、社会科学書を中心にやっていた。小宮さんの多角的才能で少しは児童書もやっていたが、方向転換するのに、十年間くらいすごく苦労したのではないですか。これなど転換に成功したケースですが、凡人が他を真似してすぐ方向を変えようとすると、大体失敗しますね。

司会 ところで、出版情報、ISBNについてはどうでしょうか。

A ISBNを早く付けようと思っているのですが、うちは早くコンピュータを入れてオンラインにしたため、転換が遅れています。六月末が期限ですからこれで相当付けるようになるのではないのでしょうか。

司会 出版情報を整備しなければならぬということでの数年やってきているわけですが、ところが流通改善の効果はみえない。出版情報を改善すれば注文、流通がよくなる

といわれたのに、そうじゃない。この上ISBN、出版資料情報センターに相当の費用をかけて、ほんとうによくなるのか。別なあらたな問題が出てくるのではないか、と思えますが……。

ISBNのメリットとは

B ぼくはISBNはまだつけていない。

要するに、取次なり書店なり流通側が積極的につかうから、出版社に協力してほしい、とちょっと出てこないか、つけたはいが役に立たないことにならないか。大体、出版社にとってISBNのメリットは何か、これまでの書籍コードで十分間に合っているのだから、なぜ、ISBNに代えるのか。出版物の輸出を考えても、輸出に関係している出版社は極く僅かでしょう。国際化ということだけでISBNをつけるというのでは説得力はない。アメリカの本にはISBNはついていますが、Bフォントではない。Bフォントにして

ハンドスキャナーで読みとれるようにといっても、書店さんが具体的につかうという、はっきりした意志表示が出るならばですが、今度は出版社主導ではじまったのでしょうか。流通側がむしろ尻込みしている。

司会 現在は移行段階だからしょうがないのか、と思いますが、今は三十桁くらいになっていますね。ISBNは十桁ですが、分類コードや、定価が入って、三十桁近くになっていますね。これを何年かつづけなければいけないわけで、どんなメリットがあるのか、と疑問です。メリットは将来のことですから予測したい点がありますけど。書店はどんなメリットがあり、出版社はどんなメリットがあるのか、メリットをはっきりさせなければいけないのではないのでしょうかね。

C 日販の下条さんは、返品データもとれるといっていますね。

B でも、他の取次では経済効率がよくなる見通しはない、といっていますよ。研究しているようですが。

司会 相当大容量のコンピュータをつかわないと、書籍の出し入れを記録して一点ずつのデータを出せないとはいけませんね。

B 書店が最も効果的につかえるのではないか、と思っているんです。ほんとうなら日書連が最も研究してもらいたい。書店さんでつかうとなったら、われわれも考えますよ。スリップを回収して分析する必要なくなりますからね。流通側が積極的に利用する見通しがない限りぼくはつけなかつもりだ。

危険性もあるでしょうね

D うちにはわりに早くつけたんですが、正直なところ、現在も、当分先も何もメリットはない。ただ、将来的に何かの可能性があるとみて協力した。

司会 三十万点からの新刊本が流通していますから、この情報処理は人間の力ではどうしようもないだろうと思う。コンピュータの力をかりなければならぬでしょう。でも、コンピュータをつかう場合のマイナスの問題を考えなければいけないのじゃないか。

A マイナスの配慮としては、これとこれはしませんといえづらい。プラスの面では、ISBNに代えたら流通に即結びつくことが一番大きいでしょう。うちは今のままでいいんですが、よそ様が皆ISBNつけられよう

も変えなくてはならぬようになりますね。

D 出版社の一部、書店の一部に反対している人がいますね。出版の自由とか、思想の自由とか、出版物に対する国家権力の介入とか懸念しているわけですが、ISBNになつて管理されると、危険性があるのは事実でしょうね。図書館の振興法なども下手な動きをしていくと読者の個人調査の問題など絡んでくる危険性はあるでしょう。

そんな危険性はわからないではないし、十分注意しなければならぬと思っているんだが、反面、現実の問題として出版量が増えていく現状は機械に頼らざるをえなくなっている。問題はISBNの導入じゃなくて、どういう利用するか、歯止めしていくかではないか、と割り切っています。

そうじゃないと、危険性があると反対しては先にすすまない。ただし、出版界には戦前統制された経験があるから、それを防ぐ方法をどうするかを考えていく。

A 出版社がつけないと、流通側が勝手につけてしまうでしょうね。

司会 ISBNをつけることで経済的メリットがある。注文が早く正確になるとなれば

つける出版社が増えてくるでしょうが……。

A 今是对立してお互に一歩も引けない状態ですが、もう少し議論をした方がいいのじゃないかと思うのですが。

B つけてくれるな、という出版社につけることはできませんよ。「手引き」で一番反発されたのはその点ですからね。

流通が全く利用していない段階で、つけない出版社にも、こちらでつけますよなどというのはおかしいよ。

主食の本も地盤沈下

司会 大学生協は、読書環境づくりをテーマにしています。これは出版業界全体で考えなければいけない問題です。読書環境づくりとは、若い読者をどうみるかの問題でもありますが。最初にAさんから、音楽まで包括して人文書を考えてもいいのじゃないか、とのお話がありましたけど、若い人はもっと先までいってしまっている。本とレコードは同じ位置にありますね。文字の文化は減びないというものの、広がりとしては弱くなっていくのではないか、それでいいのかどうか。

A 本を何のために読むのか、ということ

になるのでしょうか、これからも主食は本だと思えますね。

司会 若い層には、本を主食と考えていない者もいる。本に魅力がなくて主食でないのか、栄養がないから主食にならないのか。あるいは、本に栄養があることを知らないからなのか。

D たしか、この十数年生活意識が変化し多様化していますから、相対的には本が地盤沈下してきた現実はあるんでしょうね。それを怪しからんといってみたところでしょうか。こうなった要因はあると思う。

ぼくなんか強く感じるのは、自分が古い人間かも知らんが、本なしの人生は考えられない。ところが、本なしで人生を考えている人が沢山いる。こうなった要因をはっきりさせるのは学者の課題でもありますし、教育に大きな問題があるのではないか。最も本を読まなきゃならない世代が、受験勉強のため引っぱり回されている。大学に入って受験から解放されてから本から逃げてしまおう。一部の学生のみが熱心に本を読む。

それと教育だけで解決できない社会的な要因も出ていますね。出生率は低下して、高齢

化社会になっていく、年代の構成別変化の中で出版物にも影響は出てきています。

活字離れということで、出版界全体が悩んでいるけれど、実際活字離れを促進している出版の分野もありますね。同業に対する批判は難しいんだけど、本を読ませるために、手弁当で、全国に読書クラブつくったり、子どものために自宅に文庫を設けたりして、部分では成功してはいるけど、趨勢は本に親しむのを失なわせている。大変残念だと思う気はするんですね。

C うちの出版物でみると、学生購入者の数は減っていないと思いますよ。ただね、いろんな制約から本代に回る金が少し落ちていく。うちは二月から前年対比が下げ止まっている。二、三、四月と冊数でいいですね。昨年なんか毎月前年対比で減ってガツクリしてました。

受験が読書習慣を破壊

B うちでは人文会の中で幅の広い方だと思えますが、本によっては六十代の読者カードもぎます。十八歳以上、二十代が多い。

教育問題が出ましたが、三年毎に試験を受

ける制度が、読書習慣を断絶する。あれはマインナスになっているね。とくに、中学生の段階で読書離れする。中学生の生活の中で、一番費やしているのは音楽。音楽の方がやっぱり共感をよぶんでしょね。中学生向のいい本がないこともある。悪循環がある。

読書習慣をつける方法を考えたい。習慣が途絶えるため、大学に入ってから急に本を読めない。一部の人はよく読むわけだけどもね。だから今の制度の中で本を読ませようとするならば、いろいろな刺激を与えることが必要ですね。講演会もそうですし、図書館の充実も必要です。

C ヤングアダルト向けの本でも大学生が読むのが多いんじゃないの。

B 中・高校生も読むでしょうが、むしろ大人の方が。

司会 出版社に若者離れがあるのでは、との指摘もありますね。これは若い編集者が育てられていないからじゃないですか。全体として編集者が高年齢化しているのではないかと、この感じをもっています。また、二十代、三十代の編集者に任せ切れないでいるのじゃないですか。

B うちも編集者の平均年齢が三十五前後になっていきます。ところが、入社試験やっても、応募者の質の低下はすごいですね。最近で一番質がよかったのは、全共闘運動の頃ですね。今、若い人は全体的に安定志向です。安定志向の社会になると、われわれのような零細企業にはこない。だから入社試験やると女子学生の方がいい。出版にいい編集者が集まるのは乱世の時代ですかね。(笑)

しかも、入社してからいい編集者になろうと考えている。手とり足とり教えていい編集者になるものじゃない。それはアシスタントエディターのレベルの話で、本当の意味のエディターは、入った時から百点でも企画を並べるようじゃなくては編集者とはいえない。

C うちなども欠員があっても、翌年でないといけない補充がつかない。

読者も功利的に

D 各社の編集者の平均年齢が三十代後半から、四十代前半になっていますから、若い人の感覚に追いつけない面は出ています。うね。ただ、われわれグループの出版社は大量に迎合した出版物を出しているわけじゃない。

い。極論してしまうと、出版の中で比較的好いのはマンガを含めたその場限りの娯乐的なおもしろいもの、実用性の高い役に立つもの。人文は両方にかかわりのない分野。反面、学生の話を書き見てみるとガツカリすることが多い。たとえば先生がある課目で参考書を何冊かあげても全部読まないのがはつきりしていて、教科書だ、というとそれだけを買う。本来、むしろ学生は教科書と参考書読んであたり前だし、教科書の方を読まなくていい場合が沢山ある。

学問する態度、学生が功利的になってきている。人間的にガツガツしすぎている。物を考え、自分を見詰めることがなすぎ。それが回りまわって人文書の低迷に結びついている。編集者の中に割り切れない悩みがでてくる。年令の問題よりは、出版社の経営姿勢、方針を変更できない点にかかわっていると思う。

司会 年令が高くても、若い感覚もつければいいのですが。

編集者を全部プロダクション化してしまつて、制作管理のみ社員でやるというのはどうですか。極論ですが。

B プロダクションは、万単位の部数のものでないと商売にならない。初版が二千や三千部という出版社はプロダクションが相手にしない。

C アメリカの編集者は全部個人契約なんだね。それをやったらどうか、と時々冗談いうのだがね。

D だからアメリカは、学術出版の分野がなりたたなくなっている。その点きびしいなと思ったのは、白水社が二十年かかってやっと仏和辞典出した。普通十年かかって十年間本が売れないのは困る。ところが、一年か二年かで辞典出す社があるでしょう。コッソツ積みあげた出版社の成果を奪うようなやり方がみられる。大手がプロダクションをつかってそれをやっている。

プロダクションが使えない

司会 この三年間五百誌以上新しい雑誌が出ましたがこれは大半はプロダクションの力だと思ふ。

B 四、五人以上でプロダクションやっている場合は一点当り三十万円以上要求しますね。個人の場合でも三十万円は要求してく

る。三十万円出せる本はなかなかない。

D 校正までだね。

司会 企画からやらなきゃプロダクションは儲からない。

B プロダクションは大体大手を辞めた人が多い。

C 中小版元辞めた人が、大手版元に付いてプロダクションやっている。

司会 いろいろですね。

A アメリカ流の合併はどうなの。

司会 日本はアメリカ流の合併はないでしょうが、大、小への分化はすすむのではないですか。中がなりたたなくなっているのではないか。

C 翻訳権料で競争になったら、うちなんかまずとれない。大手にとられてしまう。ゲリラでいかなきゃ。

司会 時間がなくなりましたので、最後に書店に対して各社からのメッセージを一言づついただきたい。

書店に望むこと

A 大きくいいいますとね、日本の文化を支えていくのは人文会だと思いますよ。そうい

うことを書店さんとの共通認識にしたいと思っています。

C 書店は出版社からの情報よりも、読者からの情報に強い。それをどう生かすか。生かしてもらいたい。

司会 読者の情報を書店がすくいあげ、出版社はそれを吸収する体制ありますか。

C ありますよ。

D 書店にということではなくて、こんなこと最近感じたんです。ある先生と話していたら、その先生の本が、たまたま十年くらいの間に十版くらい出して二、三万売れたんですね。著者は「ぼくの読者は、二、三万人いる」との認識をもっている。自分の影響力で読者が本を買ったんだと、自分が本を売ったんだというような意味合いの発言ですね。

これは、書店、取次、出版社側からみるとすごく奇異に感じる面でもある。書店、取次、出版社の営業はそれぞれ自分たちが売ったんだという意識がありますから。人間は立場でいろいろ解釈し考えるものですね。

何れともあれ、人文書はプライドもある反面、大型店の売上げ構成比の中では十%たらずのシェアの中で、何十社かがひしめき合っ

ている。書店からみると随分不満だらけだろうが逆にわれわれの期待は大きい。情勢が難しくなればなるほどそれらのギャップをどう埋めていったらいいか。そのところが問題だろう。実際にはそのギャップを埋め切れないでいる。

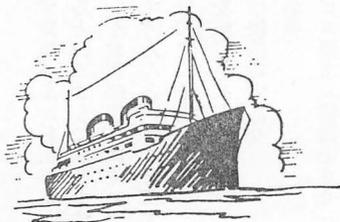
書店に何を望むかといった場合、書店がきびしくなり格差が広がって、大手の中にもドロップする書店も出て苦しくなっている。取次も同じですね。取次によって本が売れたり売れなかったりすることが現にあるんです。だから、先生方がいろいろいっても、常備寄託に出しているかどうかによって本の売れ行きは随分違う。常備に出すのをやめたら一年間千部売れた本が半分も売れなくなる。

同じ本の仕事に携っていても立場によって随分違うわけですから、この難しい時代にとり対応するか時間かけてやっていく以外にない。人文会も十何年やって来てこの程度か、との意識はありますね。

B とにかく売りづらい難しい時代になっていることは事実だと思う。なんとかお互いに交流を深めて、知恵を出しあって少しでもいい本を売っていく環境をつくりたい。

司会 御多忙のところながい時間ありがとうございました。

(四月二十六日、神楽坂、出版クラブにて)



小野二郎氏逝去

会員社である晶文社を中村勝哉氏とともに創立し、同社の取締役編集主幹でもありました小野氏は、去る四月二十六日の夜、講演先の北海道から帰宅された直後急逝されました。明治大学の教授をされ、ウイリアム・モリスの研究では日本で第一人者でした。また新境地を開いた「紅茶を受け皿で」をはじめとする多くの著述活動も良く知られるところで

す。
ここに氏の逝去を痛み、心より御冥福をお祈り申し上げます。

図書館へのアプローチ

人文会では、去る四月十二日に出版クラブへ、図書館流通センターの石井専務、東販の関根部長、根岸図書館係長をお招きして、図書館の現状について講演をして頂きました。書店さん、取次さん、出版社にとって、分っていないのが図書館のことではないかと思われる。

新刊情報一つ取ってみても、誰が、いつ、どういう方法で、どういう情報をどういう図書館に流すかと問われてみると、明快な答え出せません。また、書店さんにとってもそうですが、出版社にとっても、図書館にどうやって本を売り込むのがいいのか、常に迷うところですよ。

そこで、冒頭に御紹介した三人の識者の方々に、適切な御意見を頂戴することによって、私達の図書館へのアプローチがより効果的になることを願って講演会をもちました。

さて、まず東販さんから出された問題点をまとめてみると次のようになります。図書館というお客は扱いにくいということをお前提として考えろということです。

- 一 多種少部数の発注であり
- 二 納期を厳守させられ
- 三 代金は後払いであり
- 四 文句が多く
- 五 サービス要求(装備をさせられる等)がきつい

ということですよ。

最近の市況の冷えこみも関連するの、SLBCの会員へ申し込みをする出版社も増えてきているそうです。

SLBCは一種のブッククラブなので特殊だけれども、若干の経費補助は出版社からなされる仕組になっています。

図書館専売の書店は一部を除いては、経費がかかる(装備等)ので赤字のケースが大部

分です。マージン面での出版社側の考慮を要請したいという提案がありました。具体的には、たとえば図書館むけの定価設定をやって、余分にかかるコストをまかなう覚悟が必要なのではないかということです。

図書館と取次との関係で言えば、取次の持っている市販複合情報をデイリー(毎日)に処理できることは、取次機能が他と比べて格段に秀れているところで、この点では国会図書館も取次にはとても及ばず、図書館はこの情報を欲しがっているのが現状です。

このことから、何とか情報ネットワークを確立していくことが、図書館との取引をしていく上で、急務と考えられるということが結論として導き出されました。

以上のような東販さんからの報告・提案を受けて、図書館流通センター(以下TRCと略す)の石井専務からは、以下のようなお話しがありました。

一つには公共図書館相手に書店が商売をする際、値引き合戦が激しすぎて、自ら墓穴を掘るようなことが行なわれており、これは改善しなければならぬと思われる点だということです。

また先の東販さんの情報ネットワークの提案と関連して、TRCでは図書館むけの情報の整理を次のように行なっているとのことです。まず図書館にとって本そのものは、ナマのままの状態に等しく、たとえていうなら、調理前の魚、肉、野菜と同じことで、装備等をしてやっと納入が可能となります。そして図書整理も行なわれますが、これは公共のお金で本を買っている以上どうしても行なわなければなりません。そして購入の際には、まず書店の店頭へ行って選ぶことは少なく、原則としてカタログによる購入となります。

そこで適切な情報提供が求められますが、TRCでは、月に一回、日本図書館協会編の「新刊案内」で書誌情報を提供し、その一年分をまとめた「イヤーズ・ブック」を発行し、関係者に便宜をはかっています。

また、石井専務は御承知のように学校図書サービスの社長でもあります。専門店につ

いてのお考えをも述べられました。石井さんは、児童書専門店を出したこともありすが、残念ながら、これは失敗だったそうです。その失敗は、専門店についての考え方に誤りがあったということで、専門店はある分野のものに限って商売をすることではなく、マーケット・セグメントの考え方が基礎になければならないということです。マーケット(市場)に付いている条件が何かを分析し、その要求に答えることが一つの専門店のあり方ではないかということです。そうすると、図書館には、はっきりした顧客特性があるわけで、車に見本・カタログを積んで常に図書館を巡回、図書館の要求する納入条件を引き受ける学校図書サービスは、まさしく専門店そのものと考えられるということです。こうした商いを成立させるためにも、マジン面での再考をお願いしたいという要望も出されました。

なお、当日のお話しは盛り沢山で、とても全部を御紹介できないことをお断りします。御出席の方々には改めて紙面を借りて、御礼申し上げます。(菊池)

春秋社 二つの受賞

国立公園協会第3回 田村賞

日本地名研究所風土研究賞

樋口忠孝著 日本の景観 四六判一六〇〇円

☆ ☆ ☆

紀伊国屋書店の野口 謙氏新潟店へ転動。

八木氏の後任者として会で活躍されていた野口氏が新潟に新しい活動の場をもつことになりました。闘病から間もないまま正活動といふゴルフ活動といい、人に和をあたえるあたたかい活躍をされました。後任は佐久間健雄氏がまきました。

就任あいさつ

代表幹事 相田良雄

五月十四日の人文会第十五回総会において昨年に引き続き代表幹事をつとめることになりました。これまで以上のご支援を賜わるようお願い申し上げます。

一昨年来、人文科学書の売行は横這いしないしは減少をきたしておりますが、本年二月より、ようやく回復の兆しを示して前年を上回ってきました。実用書だけではなく、読書の楽しさを味わって頂けるような本も忘れられていない証左といえましょう。

また本年は、久しぶりに新入会員として、東海大学出版会をむかえることになりました。

同社の過去の実績を、会員社の圧倒的多数が認めた結果といえましょう。今後は会員社としても、ご活躍くださることを期待致します。

一方、現代思潮社が社の事情で七月より休業されることになりました。非常に残念であります。これまでの同社の活動に、多大の謝意を表します。

本年度も、新しい気持ちで人文書の販売にとりくみたいと存じておりますので、書店・取次店の一層のご支援をお願い申し上げます。

販売委員会より

委員長 浜地正憲

販売委員会の過去一年間の活動状況を振り返ってみますと、各取次店のフェアへの参加、¹今、知識を育むために²という小冊子の配布、受注活動、図書館への同行販売、特約店との懇談会、今年三月に入れ替えました特選人文図書セットなどがあります。

ここ数年來、「売行低迷」とか「構造不況」とかが会話の中に定着している状況で、さらに超LSIの開発・応用によるコンピュータ産業が出版そのものへの参入を示唆する朝日新聞のトップ記事を読んだりして、ますます出版は今、大きな岐路に立っている感が

あります。

人文会会則の中に「すぐれた人文科学書の普及・販売を積極的に推進すること」とありますが、これは人文会あるかぎり永遠不変の命題であると思います。その命題をどのように実践していくかということになりますと、読者層の多様化や量的生産から実質的生産への変容などの社会情勢の変化に伴い、実践へのアプローチも様々な切り口で行なわなければならないと思います。特選人文図書セットを歴史書懇話会の会員社にも参加してもらい、今までの単一セットから、基本・思想・哲学・心理・宗教・社会・文化・民俗という複数選択セットにしましたのも、一つのアプローチだと考えます。また、人文会ニュースの一連の座談会や論文に、人文図書の中で、学術・専門・入門・啓蒙書といった読者への対応の仕方や装帧・定価・分額の諸問題、流通の機能など販売についての様々な切り口と課題を提起していただいております。これらの視座から、書店・取次店・版元三者のグレイド・アップされた関係を今後一層強めて、本当に実質を伴った活動を展開していきたいものと思えます。特に、特約店・準特約店の

皆様には、今年度は全面的更改になりませんが、増益に強く結びつけられる対応を考えております。最後に、書店・取次店の皆様には、今後とも忌憚のないご意見や提案を賜りまして、「すぐれた人文科学書の普及・販売」に考えられますあらゆる角度から、取り組んでみたいものと存じます。よろしく、ご協力の程を賜りますよう、重ねてお願い申し上げます。

調査企画委員会より

委員長 萬 洲 隆 男

人文会も発足しましてから一四年たち、それなりに新しい方向を探らねばなりません。たとえば、毎年書店様にお送りしている人文会セット、二年毎に更新している人文会特約店制度等については、会の内部でもいろいろと議論も出、検討されていますが、まだ新しい方向は見出されていません。

調査企画委員会では、今年八月に特約店の更新されるのを機会に、書店様から特約店制

度に対する何か新しい提案をいただきたく、アンケート調査をするつもりです。また人文書は性格上、公共・大学・短大図書館に対する販売促進をより充実させることが必要になってきています。そこで図書館に強い書店様との情報交換、そして更に直接図書館関係者との意見交換も積極的に行ないたいと思っています。

最大かつ最も難題である返品問題など改めるべき事柄が山積されています。それらを焦らず、しかし、しつこく問題解決に取り組みたいと存じます。

弘報委員会より

委員長 神 田 治

弘報委員会は発足以来、一貫して人文会の活動を「人文会ニュース」を通して書店・取次店に対してPRし、ご協力をお願いしてきました。

振り返りますと、常備政策・特約店政策・書店インタビュール・ブックフェア政策・人文書を取りまく環境等またタイムリーな時事問

題を提供して常に話題となりました。これらはひとえに書店・取次店各位の人文会への関心の深さ、期待の高さと常々身をひきしめながら感謝している次第です。今後とも諸先輩の築き上げた伝統にそうべくニュースの刊行を続ける所存です。書店・取次店の各位も人文会への叱正や、ニュースの誌面充実のため忌憚のないご意見を委員会宛お寄せ下さい。

八十年代は不透明な時代と捉えられ、定着しつともあります。不安な時には「心」の問題が重視され求められますが、現在はまさにそのような時代のようにです。人文図書が「心」を捉え「人間性」を希求する人々の仲立ちとして今までも増してその役割を果すべく努める時です。人文会の活動はそのような書籍の普及と販売が主旨であり、全員二十一社の目的でもあります。

弘報委員会は様々な人文会の活動をニュースによってフォローし、書店・取次店各位の注目する視点をみつめながら、諸賢のお役に立つべく努力する所存ですので、今後ともご愛読願ひ上げます。

人文会會員名簿

(113-91 東京都文京区 本郷局私書函89号)

57. 8. 5現在

	社名	担当者	番 号	所 在 地	電 話
幹 事	青木書店	山根 褒	101	千代田区神田神保町1-60	292-0481
	大月書店	原田 敦雄	113	文京区本郷2-11-9	813-4651
	紀伊国屋書店	佐久間健雄	102	千代田区五番町12 ドミール五番町	263-9006
休 会 中	勁草書房	氏家 富男	112	文京区後楽2-23-15	814-6861
	現代思潮社	安藤 豊	112	文京区小日向1-24-8	943-4406
	社会思想社	渡辺 和彦	113	文京区本郷1-25-21	813-8101
幹 事	春秋社	神田 治	101	千代田区外神田2-18-6	255-9611
幹 事	晶文社	萬洲 隆男	101	千代田区外神田2-1-12	255-4502
	誠信書房	浜地 正憲	112	文京区大塚3-20-6	946-5666
	筑摩書房	菊池 明郎	101	千代田区神田小川町2-8	291-7651
	東海大学出版会	岡田栄三郎	160	新宿区新宿3-27-4 東海ビル	356-1541
会 長	東京創元社	星野 治吉	162	新宿区新小川町1-5	268-8231
	東京大学出版会	中平千三郎	113	文京区本郷7-3-1	812-2111 内7955
	〃	佐々木貞次	〃	〃	811-2157
	日本評論社	後藤 光行	160	新宿区須賀町14	341-6161
	福村出版	福村 惇一	112	文京区小石川1-3-17	813-3981
	平凡社	丸山 正実	102	千代田区三番町5 Kビル	265-0455
幹 事	法政大学出版局	市川 昭夫	106	港区南麻布2-8-4	453-0717
代表幹事	みすず書房	相田 良雄	113	文京区本郷5-32-21	814-0131
幹 事	未来社	石井奈良彦	112	文京区小石川3-7-2	814-5521
	有斐閣	佐藤 進	101	千代田区神田神保町2-17	265-6811
	吉川弘文館	川越 重行	113	文京区本郷7-2-8	813-9151

販売委員会 ◎浜地 氏家 篠崎 佐藤 星野 岡田
 弘報委員会 ◎神田 後藤 原田 佐久間 菊池
 調査・企画委員会 ◎萬洲 川越 渡辺 竹内 丸山
 ◎印は委員長

時制論 文学テクストの分析

¥6500

H・ヴァインリヒ／論版豊(他訳) 西欧の現代諸言語を中心に、文学テクストの実例をあげて時制の問題を詳細に論じた、テクスト文法の古典的名著である。

進化と革命

¥3300

ウエルトハイム／清水川勝訳 社会進化と革命を軸に生物学的モデルに依拠した動態論的社会学を構想。第三世界論に新地平を拓き、人類の未来を問う。

数字とユーモア

¥1500

J・パウロス／橋本英典訳 豊富な図や絵を使って、数学とユーモアの構造を理論的に比較した本書は、他に類書をみないきわめてユニークな本である。

紀伊國屋書店

東京都新宿区新宿3 (354)0131

現代思潮社

新猿楽記 雲州消息

三〇〇〇円

藤原明衡撰 重松明久校注 <古典文庫>

平安京の一宵、一家を上げた猿楽見物にことよせて世態人情を描出した諷刺文学と往来物の嚆矢であり公卿間に往返された二百十数通の書簡を収録した雲州消息。風俗図版を加える源為憲撰 江口孝夫校注 <古典文庫>

三宝絵詞

(上・下) 各一八〇〇円

平安中期の仏教説話集。仏・法・僧の三巻より成る。当代隨一の学者源為憲が、若くして仏門に入った尊子内親王への、仏教教養書として書かれたものである。口語訳をそえる。

東京都文京区小日向1-24 振替東京1-72442

社会思想社

沖繩自立への挑戦

〈復帰〉十年——南端から発せられた警鐘の書

新崎盛暉・川満信一・比嘉良彦他編 ●一四〇〇円
「軍事基地Ⅱ沖繩」の既成事実化が進行するなかで、特別県制から独立論まで広範囲に及ぶ議論を収める。

サガとエツダの世界

山室 静著(そしおぶつくす) 予備一六〇〇円

アトミックソルジャー

8月刊 H・ローゼンバーグ著 中尾はじめ他訳

東京都文京区本郷1-25・電話03-813-8101

武谷三男

科学者の社会的責任

核兵器に関して 核物理学者・武谷の戦中戦後の闘いを通して責任論を展開。1600円 ¥250

木村 駿

日本人の対人恐怖

〈社会心理学選書2〉 日本人特有の対人恐怖症を比較文化論的に解明する。1900円 ¥250

H・パースンズ/佐藤 任訳

現代に生きる仏教

現代における仏教のもつ意味(=価値)とは何か。東西の思想を比較する。1600円 ¥250

鈴木 均

巨大企業の文化戦略

ビッグ・ビジネスのCMを通して人間と商品と広告の関係と文化戦略を探る。1800円 ¥250

東京都文京区後楽2-23 勁草書房 振替東京5-175253

誠信書房

東京都文京区大塚3-20-6

子どもの目から見た世界

ピアジェの認識理論の実際 M・サイム／星三和子
訳 子どもたちの思考力をピアジェ理論にそって豊かな図で説明していく。数学や理科の教師、子どもの心理を理解しようとする両親へおくる。 1000円

この一歩から

障害児理解のしかた 土佐林 一著 障害とは一体何なのかとその正しい理解のしかたと実践方法について、豊富な具体例をあげて、やさしくかみくだいて書かれた障害児をもつ親のための本。 1000円

動機の文法

ケネス・パーク 森常治訳 人間のあらゆる言語活動を分析し、思考の基本形式と行動の動機を解明する大著。待望の邦訳。 5800円

モスクワの冬

ヴァルター・ベンヤミン 藤川芳朗訳 凍てつく街でベンヤミンは何を得、何を失ったか。1926-27年の肉声あふれる旅の記録。 1700円

異端審問

ホルヘ・ルイス・ボルヘス 中村健二訳 世界は一冊の書物である——20世紀文学の巨人ボルヘスの、刺戟にみちた文芸論集。 1800円

現代建築家

鈴木博之・石井和紘 建築家は何をめざしているのか。村野藤吾、丹下健三、磯崎新氏ら第一線の建築家たちの人間と仕事。 1900円

晶文社

東京都千代田区外神田2-1-12
電話 (255) 4501

筑摩書房

東京神田小川町2

● 完結発売中

- ① 名僧評伝 編集・解説 清水公照 一休・正三・白隠等、名僧の行実の跡を辿る
 - ② 仏教随想 編集・解説 橋本峻雄 青春の赤裸々な告白「わが六道の闇夜」ほか
 - ③ 仏教小説 編集・解説 柳田聖山 良寛を描いた評判作「袈笠の人」ほかを収録
- B6判・上製カバー装・平均三七〇頁●各1700円

水上勉 仏教文集

苦難にみちた人生遍歴のはてに独自の境地を拓いた作家
水上勉の仏教にかかわる深い経験の全体像！ ● 全3巻

春秋社

倉前盛通

ゲオポリティクス入門

— 国家戦略策定の仮設 —

激動する国際情勢の背後にある諸大国の「本音」を推測し国家の戦略を策定するための有効な仮設として、地政学の復権を主張し続けてきた著者が、その学問としての起源と可能性及び状況分析を総合的に語る。
四六判上製／一五〇〇円

東京都千代田区外神田2-18-6 ☎(03)255-9611

創元選書 / 歴史書

日本考古学概説

*小林行雄著 日本考古学の
成果を高度にもりこみ、平明
詳細に記述した定本 一五〇〇円

アメリカ史研究入門

*中屋健一著 アメリカが國
際的に果たす役割の増大と共に
重要性をもつ名著 二〇〇〇円

概説 西洋史

*衣笠茂・田村満穂・中村賢二郎・
廣資源太郎著 一般教養としても楽
しめる西洋社会の歴史の把握 一八〇〇円

概説 現代史

*今津 晃著 第一次大戦から二
年までの激動する現代世界を明確か
つ客観的にまとめた労作 一五〇〇円

日本文化史

*サンソム福井利吉郎訳 世界的
視点からの確に論述、欧米における
日本研究の基となった名著 一八〇〇円

東京創元社 162東京都新宿区新小川町

都市文化論

葉山 峻

〈好評発売中〉

定価 二〇〇〇円

「地方の時代」をアイデンティティの時代ととらえ、市民とともに手づくりの市政をくりひろげてきた藤沢市長が、在任10年をふり返るとともに、二十一世紀を射程に緑と文化の香り高い街づくりのヴィジョンを、多彩なゲストをまじえて縦横に展開するものである。



日本評論社

東京都新宿区須賀町14

「歴史のなかの女性」の実像に迫り、
女性史研究の新たな地平を切拓く、
本格的な「女性史」、全5巻完結!

日本女性史 全5巻 完結

女性史総合研究会編 内容見本呈 / 各一八〇〇円

第5巻 現代

最終回配本

第1巻 原始・古代

大正デモクラシーに育かれた婦人
運動から「戦後」婦人解放運動へ。

第2巻 中世

「女工哀史」の実態を分析し、婦人運
動・婦人解放思想を多面的に解明。

第3巻 近世

第4巻 近代

東京大学出版会

113文京区本郷 図書館録呈 ☎03-811-8814

現代の児童観と教育

三枝孝弘・田畑 治編

A5判 / 定価六〇〇〇円

現代の児童観と教育思想など、今日の教育に
関する問題を多面的・構造的に究明した学際
的共同研究の成果を集大成する。

小川利夫・江藤恭二編

A5判 / 定価六〇〇〇円

現代学制改革の展望

学制改革の現代的視座とは、教育課程のあり
方とはなど、これからの教育を模索した学際
的共同研究の成果を集大成する。

福村出版 電話東京 (813)3981

東京・文京 小石川1-3

パリの 聖月曜日

定価1,700円

平凡社

振替 東京8-29639

●19世紀都市騒乱の舞台裏
喜安朗 1832年のコレラ流行を背景に、居酒屋、貧民宿、病院、水道、呼売り商人などの実態に触れながら、七月革命から二月革命に至るパリの姿を描く。

〒102 東京都千代田区三番町5

サミュエル・ジヨンソン伝 2

ボズウェル 人間性への深い省察にみちた18世紀英国の文人の生活と意見。全3冊 中野好之訳 既刊1、2 各頁200円

隠喩としての病い

ソングラ 癌と結核がはらむ隠喩を、文学・医学・政治等多様な視点から解説する病いの記号論。富山太佳夫訳 二二〇〇円

物理学とは何だろっか

朝永振一郎著作集7 著者の絶筆の名著と、生前心に懐かれていたその全構想の一端を語った物理学会講演とを収める。伊藤大介解説 三三〇〇円

人は獣に及ばず

中野好夫 核問題から江川騒動まで歯に衣着せぬ鋭い時評、読書をめぐる随想、亡友への追悼等、最近年の60篇。二二〇〇円

東京文京本郷 3丁目17-15

みすず書房

法政大学出版局

森嘉兵衛著作集／第二巻 無尽金融史論

中世から近代に至るまで広く行なわれた無尽の機能、庶民生活との関連を追求した草の根の経済史。定価6800円／特別定価6500円／特別定価5800円
★既刊一第七巻／南部藩百姓一揆の研究問題性及び史的意義を考察。定価5800円

藝能史研究会編

日本芸能史

第二巻／古代一中世

宮廷や寺院における古代の芸能の開花と芸都市の発展を背景とするやすらつ歌謡・宮座舞能り・猿楽能の今様の意匠を立上げ、一寄合の芸能に及ぶ。編集担当一林屋辰三郎……定価1800円／全七巻内容見本
*既刊一第一巻／原始・古代(編集担当一林屋辰三郎)……定価1800円

東京都港区南麻布2-8／振替東京6-95814

中国の封建的世界像

岩間 一雄著

中国における封建的世界像とその展開を透視することによって、中国封建思想史を概括的に把握して複雑多様な同時代の中国を理解する鍵を示めず。A5判上製・価三〇〇〇円

都市民俗論の課題

宮田 登著

都市民俗学への道／都市民俗学の基準／柳田国男の都市論／現代社会と民間信仰／都市空間としての浅草／厄除けの心理／映像民俗学の可能性／外四六判上製・価二〇〇〇円

東京・文京小石川3-7

未来社

電話・代表 (814) 5521

非売品

昭和57年8月30日発行 年4回発行 第35号
発行所 人文会 みすず書房内
〒113 東京都文京区本郷5-32-21
(113-91 東京都文京区 本郷局私書函89号)

回覧者印	回覧者印	回覧者印	回覧者印	回覧者印